

平成 28 年度田辺市障害者理解促進研修・啓発事業 講演会

主催 NPO 法人 和歌山県自閉症協会
共催 和歌山県発達障害者支援センター ポラリス

「発達障害の診断と治療」

～ 二次的障害も含めて～

講師 一般社団法人 日本自閉症協会 会長
社会福祉法人 正夢の会 理事長

市川宏伸先生



平成 28 年度 田辺市障害者理解促進研修・啓発事業として、NPO 法人 和歌山県自閉症協会が講演会を開催するにあたり、ポラリスの啓発事業の一環として平成 29 年 1 月 15 日(日)紀南文化会館 大ホールにて、一般財団法人 日本自閉症協会会長/社会福祉法人 正夢の会理事長 市川宏伸先生をお招きし、ご講演頂きました。「発達障害の診断と治療 ～二次的障害も含めて～」というテーマで、2 部に分けてのご講演と聴講者からの質疑にお応え頂きました。

第 1 部講演は下記の通りです。

発達障害は、平成 17 年から施行され昨年改定された発達障害者支援法の中で定義されている。発達障害の原因について、昔は子育ての問題で母親の愛情が足りないと言われた時代もあったが、現在は何らかの脳機能障害が前提にあると考えられている。ただし脳機能の本質的解明には至っていない。

昨今の社会的問題に、いじめ、不登校、ひきこもり、虐待、依存、自傷などがある。東京都の最近の報告では、不登校の原因として学習面の課題よりも対人面の課題が目立ち、50 パーセントに発達障害の可能性が考えられるとのこと。コミュニケーションが苦手であると、子育てや教育の場面でも周囲との関係が悪くなりやすい。そうすると本来の特性が顕在化して症状が目立つようになり、叱責などによる関係悪化の悪循環に陥りやすい。理解しづらい事象を安易に発達障害と結びつけることは間違っているが、発達障害の特性を理解することで問題に対応しやすくなるかもしれないという意味で、社会的問題の背景に目を向け、発達障害の特性と関連付けて考えられる部分はあるように思う。社会が発達障害の特性を理解し、良い面も含めて受け入れていくことが出来れば、これらの問題は減っていくかもしれない。

対人関係、コミュニケーションに課題がある場合、集団適応が難しく不登校になりやすい。心理的ストレス、いじめなどもこれらを促進し、不登校が継続するとひきこもりに移行しやすい。本人が抱える自己不全感を改善し自信を高めていくためには、他の人に合わせようとするより特性を生かせるように考えることが重要である。外来では家族の相談が中心になることもあるが、「昔のあなたと今のあなたは違う」、「家族はいつもあなたの味方だ」という 2 点を本人に伝えてもらっている。相手の気持ちを理解しづらく自分の気持ちも上手く

表現できなかつたり、注意されても意味がわからず同じ失敗を繰り返しやすい場合、保護者や先生に可愛くない反抗的な子どもだという印象を与えるかもしれない。友達からも変わっていると思われることが多い。これらはいじめや虐待のリスクに繋がる。発達障害と自傷・自殺の問題との関連性は必ずしも高くないが、自己不全感や自己評価が低い場合に起こりやすく、衝動性との関連も指摘されている。依存の問題でも、自己不全感からの現実逃避や、新奇探求性亢進による判断力低下などの問題が指摘されている。

支援の現場では、これまで知的障害が重ければ支援が難しいという前提で考えられていたが、発達障害の支援においては知的障害がなくても支援が困難である場合は多い。教育に関しても、知的能力に問題はないが、周囲との対人関係、注意力や衝動性の問題、感覚の問題などによって集団学習場面に適応できないことがある。就労に関しても、知的障害のため上手くいかないというよりも、職場での人間関係が上手くいかないことの方が問題になりやすい。発達障害の特性を持つ方は、考え方が頑なで融通が利かず、社会常識が足りないと言われることが多い。常識的なマナーの問題として指摘しても、規則に反していないため問題ないと思える方もいる。そのような方の場合でも、守ってほしい内容を規則に加えると、重要性を理解して素直に応じるようになることが多い。そのような意味でも、発達障害の特性自体は社会にとってマイナスではないだろうと思う。支援の現場では、発達障害の特性を治そうと考えることはない。難しい部分をフォローしながら、良い部分を生かしていこう、発達障害を受け入れられる社会にしていこうという考え方が主流になっている。

第2部講演は下記の通りです。

発達障害は、特性の程度がスペクトラム(連続体)で分布しているため、発達障害のグループとそうでないグループの境界を明確に示すことが難しいという特徴がある。本人が発達障害の特性を持っていることが前提であるが、環境によっても状態や適応度が大きく変化するため、成人してから初めて気付く場合も多い。現在は発達障害の特性によって本人や周囲が対応困難を感じている場合、支援の対象とするために診断が検討される。発達障害につながる遺伝的要因は、あくまでも様々な要因の1つとしてはあるが、一定の影響があると考えられている。子どもの相談を受ける際、家族にも似た特性が見られることがある。その場合、家族が子どもの特性に気付きにくかったり、課題として捉えていなかったりすることがある。また、発達障害の特徴として、複数の発達障害が併存していることが多い。現在の診断基準は、複数の発達障害を同時に診断することが可能であるため、今後は自閉スペクトラム症のみという診断は珍しくなるかもしれない。現在の診断基準には、感覚過敏の問題も追加されている。

発達障害の診断は、国際的な診断基準である ICD - 10 (世界保健機関) や、DSM-5 (アメリカ精神医学会) に基づいて行われている。診断の際、WISC や WAIS などの知能検査を行う場合もあるが、これは本人の認知発達の特徴を見るためであって、これらの検査で発達障害を診断することは出来ない。外来では、ASQ などの質問紙検査を補助的に行う場合もある。

発達障害者支援法ができるまで、知的障害を伴わない発達障害は公的な支援の対象ではなかった。現在は、知的障害がある場合は療育手帳、知的障害がない場合は精神障害者保健福祉手帳を取得できるようになっている。精神障害者保健福祉手帳の名称に抵抗感を持つ方もいるが、それは障害者差別ではないかという説明を行っている。これまでは知的障害(精神遅滞)の診断基準に IQ70 以下という記述があった。しかし、現在の知的能力障害群の診断基準に IQ70 という記述はない。実際の支援現場では、知能指数が高いと適応できて低いと適応できないという前提が成り立たないため、現在は知能指数だけでなく、年齢ごとに出来ている行動をチェックするような適応行動尺度を利用して、本人の適応状態を把握していこうという流れになっている。

平成 10 年頃を境に、知的障害を伴わない発達障害の方に医療現場でよく出会うようになった。急に増えたというよりも、社会的な状況の中で適応しにくさを感じるようになってきたからではないかと考えている。最初は小学校で話題になっていたが、その後、中学・高校・大学へと広がっている。現在は、大学入試の場面でも主治医の意見書などによって、本人の特性に合わせた一定の配慮が得られるようになってきている。発達障害支援室を設置する大学も増えてきている。最初に設置したのが東京大学や慶応大学なので、知能指数が高くても適応困難になる方がいるということをよく表していると思う。現在は、高校生のための通級を設置しようという話が進んでいる。

発達障害は本質的に解明されていないため、投薬治療によって治すことは出来ない。薬が効いている間に良い働きかけを行い、薬がなくても適応していける状態を目指す目的で投薬治療が行われている。自傷他害に対しては抗精神病薬、気分障害に対しては気分安定薬、強迫症状に対してはてんかん薬や抗うつ薬などが用いられている。リスパダールやエビリファイなども、易怒性に対して使えるようになってきている。ADHD 症状に対しては、コンサータやストラテラが用いられている。今後、インチュニブやビバンセというような新しい薬も使われるようになる。

発達障害の方を支援する際、無理に社会的規範に合わせようとしても難しい場合が多い。本人の特性を生かしていくため、まず対応を工夫したり環境を調整したりすることが大切だと考えている。発達障害の人が、そうでない人とは違ったソフトを積んでいるとすれば、こちらのソフトでは動かない。まず発達障害の人が積んでいるソフトがどのようなものかを知って、互換性ソフトを作ることができる人がよい支援者になるのだろうと思う。

【 質疑応答 】

発達障害の二次的障害について

統合失調症、うつ病、パーソナリティ障害のような症状は、本人が苦しい状況におかれることで出てくる可能性がある。そのような苦しい状況を解消していくことが大切。

ADHD 児童への投薬治療の課題について

アメリカは薬が好きだが、日本では好まない方が多い。外来ではパンフレットをたくさん渡して、“家族で相談して下さい”と伝える。家族で意見が割れないようにすることは大切。保護者が反対すれば、薬以外の方法を考える。“もし希望があれば薬も試せますよ”と説明しておく。効果について、必ず効くとは説明しない。実際 3 割には効果がない。効くと言って効かなかった場合、患者との関係が悪くなってしまう。

クラスの定型発達児童に障害について説明する方法について

障害だと説明する必要はないと思うが、本人の特徴については家族に承諾を得てから説明してもよいかもしれない。その際、悪い面だけでなく、良い面を伝えておくことは大切。先生が注意ばかりすると、他の子どもは先生を助けようとして一緒になって注意するので本人がしんどくなってしまう。

発達特性はあるが、本人も保護者も認めない場合の対応について

認めない理由を考えて対応する。上から目線で“認めなさい”ではなく、困っていることを具体的に聞いて、それについて一緒に困りながら考えようとする対応が重要だと思う。先生であれば、“学校では上手くいかないのですが、ご家庭ではどのような対応していますか？”と聞いてみる。“どうも上手くいかないのです、他の人の意見も聞いてみましょうか？”と相談しながら医療機関などにつなげられるとよい。保護者が納得していない段階で、無理に医療機関に連れて来られたというケースは結局上手くいかない。

ASD 児童の暴言暴力に対する教員の対応について

医療でも福祉でも、現在はクールダウン、カームダウンの対応が第一と言われている。本人が興奮している時に説教をしても内容が頭に入らない。クラスで水槽を割ってしまった子どもに“謝れ”と言うと、部屋の窓を全て割ってしまったという話がある。叱らずに空き教室に連れて行き、20分程して落ち着いてから“どうしたの？”と聞くと素直に反省できることが多い。

家族にも特性がある場合の支援方法について

本人だけでなく、家族が発達障害の特性を持っていることはよくある。現在の医療や教育では、子どもだけではなく家族にも対応していこうという考え方が一般的だと思う。ただ、家族支援には時間がかかることが多い。しばらく外来に通った保護者が“実は…”と困り事を話し始めることがある。家族に対して、上から目線で“変えてやろう”とやっても上手くいかない。“大変ですね”と話しながら、一緒に困りながら考えていくことが重要。

以上の内容で、長時間にわたり貴重なご講演を頂きました。

最後に、末筆にはなりましたが、市川先生が今後ますますご活躍されることを心よりお祈り申し上げます。



く説明してくれた。診断方法や治療の現状を知ることができた。

- ・市川先生のポジティブな考え方は参考になります。ありがとうございました。
- ・質疑応答や多くの事例で、対応策を知れて良かった。発達障害の子と関わり、理解していくために保護者との信頼関係を築くこと、また同じ目線で過ごしていくことを実践していきたい。
- ・質疑が挙手ではなくアンケート用紙で行われ、丁寧に応答して頂き、大変参考になることが多く、気付きをたくさん得られました。
- ・治療の実情や関わり、考え方がよくわかりました。当事者、保護者との向き合い方も、よく考えていきたいと思えます。
- ・普段、支援員として当事者とどう接して良いか日々悩んでいる中で今回の講演ですごく参考になりました。
- ・自閉症、ADHD の子どもを持つ親です。なぜ子ども達がこうなのか疑問でしたから、自分が小さかった時の事などを考えると、遺伝的要素があると分かり理解できました。子どもを持つべきだったのか後悔もしましたが、この子達を理解して受け入れてくれる社会になって欲しいものです。
- ・発達障害を持っている人への質問や対応の仕方を聞くことが出来てよかったです。たとえばアスペルガーの方には「昨日何したの」と聞いても1日24時間のうちたくさんあったことのどれを答えてばよいのか分からなくなるので、曖昧な言い方はせずに「昨日したこと一番印象に残ったことは」と伝えれば相手も答えやすくなる、というお話をしていただき、とても参考になり良かったです。
- ・高等学校は特別クラスがないため一般の生徒と同じクラスで授業等を受けなければならない中で、発達障害の生徒を理解しなければなりません。今回の講演で詳しく話して下さったのでとても分かりやすく、今後の指導をする上で活かしていきたいです。
- ・支援と指導の仕方が明確でわかりやすかったです。言葉1つでプライドを傷つけるなど、関わる中での気配りの大切さがよくわかりました。
- ・とてもわかりやすく、知りたい事の答えが、はっとさせられることが多々ありました。現在1年生の担任です。声かけ、注意の仕方、明日から早速変えていこうと思えます。
- ・発達障害の特性を理解し、配慮をしたうえで二次障害をいかに防ぐかが大切だと感じました。時代と共に発達障害の背景も変化してきていることがよく分かり良かったです。質問に丁寧に回答して頂き良かったです。
- ・発達障害の診断と治療について詳しく知ることが出来て良かったです。もっと周りの人達が障害について理解して、その人らしさ、特性を生かして過ごせるように私たちが工夫していけないと思いました。これからもっと勉強していきたいです。
- ・色々なケースを聞いて、我が家ではそれをどのように応用すれば良いかと参考になりました。
- ・保護者として希望も頂きました。前向きに行けそうです。
- ・当事者の特性に合わせた支援の在り方、押し付けるのではなく、自発性による変化を導き出す考え方は勉強になった。
- ・発達障害者やアスペルガーの方との付き合い方を示していただき、どう関わっていけばいいか悩む所でしたが、これらに気を付けて対応していきながら自分自身をも振り返ることが出来ました。

要望・改善してほしい点について

- ・専門用語が多く出てきたので、解説が必要だと思います。
- ・プリントされていない内容を話している時に、画面が切り替わるのが速くて内容が読めなかった。
- ・スライド資料が細かい部分があった。もう少し大きいと見やすいと思った。
- ・先生が出されているスライドの中でレジュメにないものが多くあったが、その分もレジュメに載せていただ

ければもっとわかりやすかった気がします。

- ・プロジェクターの解像度をもう少しあげて鮮明なものにしてもらいたい。音声が少しこもったようで聞き取りづらい所があった。冊子のホチキス止めはもう少し上下に幅を広げてもらうとページをめくりやすいです。
- ・知りたいこと、メモ取り切れずに残念でした。
- ・会場が暗くて資料が見えづらい。
- ・質問の内容が少しわかりにくかったです。
- ・薬、法律など、少し難しいところがあった。もう少しかみ砕いて言ってほしい。
- ・二次障害について、もう少し詳しく話して欲しかった。
- ・事例の中でどのような対応をしたらよいかなど、保育の場で生かされることをもう少し知りたかった。
- ・具体的な対応、配慮の例について、もう少し教えて頂ければありがたいと思います。
- ・会場は広くなり、よかったです。少し寒かった気はします。
- ・出来れば、紀南、紀中、紀北とか、内容とかで講演を分けて行っていただきたい。
- ・若い人が多く、子ども連れの参加者対応が必要かと思いました。
- ・注意の仕方をわかるように工夫する、それが難しいので、もっとヒントをもたえたらと思った。刑務所の話が、そうかな…と思いました。そんなに長くかかる、長い目で見ないといけないのでしょうか。時々長期に休む子に対して、長い目で待つことが必要かな…と思うのですが、管理職からは、登校されるよう工夫は必要と言われる。どう工夫したらよいのか。大人には、有給もあるので、しんどい時には休んでもいいと思うことはダメでしょうか。
- ・夏休みの時期で、平日昼間に実施してはどうでしょうか。休日に講演会をしても参加する人の意欲がなくなってしまう。

ポラリスへの要望や関心のあることについて

- ・ポラリスという言葉は初めて聞いた言葉であり、もっと皆が知るように広めるべきではないでしょうか。
- ・障害児者の教育、支援に関わる行政、事業所へ出向いて、指導をどんどんしてほしい。ポラリスが必要と考える人材、保育、教育、福祉支援者等の育成の必要性を訴えてほしい。その人材には人件費も確保することも説いてほしい。
- ・発達障害がある方への対応、支援方法、就労支援等。
- ・個別対応の相談にのってほしい。
- ・具体的な支援方法や改善策について教えて頂きたいです。
- ・今後も新しい支援の在り方など情報提供よろしくお願いします。
- ・紀南にも専門施設がほしい。
- ・地域限定で、保護者・支援者を集めての学習会をやってほしい。
- ・今回のお話のように、他職域にわたる内容、多職種間で学び合える場を今度もよろしくお願いします。
- ・児童生徒への支援について、地域(東牟婁)へ指導助言を広く頂けるとありがたいです。
- ・早期発見で対応していけるように、私たちでも出来る診断法を知りたかったです。
- ・発達障害の子たちの思春期の対応について
- ・子どもの視点ではなく大人になってからどのように社会に適応していくかなどという事についての講演などしてほしいと思います。
- ・大人の発達障害を対象とした、ソーシャルスキルトレーニングを行ってほしい。
- ・PCからの講演会の応募フォームを作ってほしい(メールではなくて)。

- ・今後も当事者や家族、関係者が参加できる講演会を開催して欲しい。
- ・これからもどんどんわかりやすく理解につながる講演会の実施をお願いします。
- ・何度も聞かないと障害に対する支援や理解はわからないので、以前されたような内容でも、また研修をしてください。
- ・意識もつ、もたないで多様な見方の違いが出てくるものだとつくづく思います。
- ・関心を持っている人に発達障害を知ってもらい、理解を広めるのに適した講演でしたが、実際に関わる職に就く立場として具体的にどのようなあり方でどのような援助が求められるかという点について聞きたいと思った。
- ・要望は特にありません。関心のあることは、身体と感覚のケア、多職種連携、思春期成人期の支援、ユニバーサルデザイン教育など。

次回以降の講演会への要望

- ・いつも私達が興味のある(知りたい)テーマを講演いただけるのでうれしいです。今後もよろしくをお願いします。
- ・紀南地方で講演会があれば参加したいと思います。
- ・せっかくの講演なので、もっと告知を広く、目につきやすい形でやって頂きたいです。ポスター、チラシ等。次回もこういった講演があれば是非参加したいのですが、自分がちゃんと情報をキャッチできるか心配なので。ホームページはチェックするように心がけますが。
- ・事例を具体的にとりあげ、よい結果が出ている事例があれば説明してほしい。
- ・発達障害の方への関わり方を、様々な場面での具体的な例を知りたい。成功だけでなく失敗例も知りたい。
- ・アスペルガー成人に対して具体的な接し方
- ・大人の発達障害者の社会参加方法についての講演を希望。上手くいかない家族関係の改善の仕方についての講演会希望。
- ・大人の発達障害。親や家族の心理について、家族支援など。
- ・精神障害のある人に対する支援
- ・愛着障害と ADHD 自閉症の似て非なるところ
- ・県内の医療機関（児童や発達関連）の取り組みを発表してほしい。
- ・発達障害の子どもの集団でのその子が嫌がることへの対応など。
- ・子どもの特性を生かして、今後進学、就職をどう決めていったらいいのか。
- ・講演会に参加していつも思うのですが、重度の障害者のテーマがあまりにも少ないというより、ごさいません。いつも置き去りになっています。講演のテーマで、一部だけでも加えていただくことは出来ないでしょうか。
- ・地域での医療、福祉、教育、保護者、本人がつながっていくための講演会。
- ・他の都道府県での実践等があれば伺いたい。
- ・障害者は、外国のほうが生活しやすいと聞きます。今の海外の発達障害の支援を聞かせてもらいたい。
- ・シンポジウム形式やワークショップなど、色々な形態のものがあると良いと思いました。一方的に聞くばかりでなく、参加できるものも必要かと考えています。
- ・当事者を支える家族に対するもう少し踏み込んだ発達障害を正しく理解できる講座などを開催して頂けるとありがたいです。実際他の家庭の方がどう成長に寄り添い、問題に対応しているのか。ペアレントメンターにも関心があります。

アンケートに対する回答

- ・ 単身赴任で他府県で暮らす夫婦共に発達障害を持っています。他府県の発達障害者支援センター間で連携して支援して頂くことは可能でしょうか？
 - ご本人の許可を頂き和歌山県発達障害者支援センターから他府県への情報提供を行うことは可能です。また、各発達障害者支援センター間での情報共有につきましてもご本人の同意のもと実施させていただきます。ただ、各都道府県発達障害者支援センターは、地域の社会資源やニーズにより支援内容が異なりますので、どのような支援ができるかについて、まずはお住まいの発達障害者支援センターにお問い合わせください。
- ・ 発達障害に関する講演会の講師依頼について相談したり出来ますか？
 - 可能な限りご相談に応じます。ポラリスまでお問い合わせください。
- ・ 講演会中、託児は無理なのでしょうか？
 - 今回、託児の実施はありませんでしたが、主催により託児を設ける講演会もございます。チラシ等ご確認頂けると幸いです。
- ・ 県内で発達障害に詳しい医師をポラリスのホームページにあげて下さい
 - 和歌山県障害福祉課のホームページに「発達障害児者の診療を行っている医療機関一覧」がございます。そちらをご参照ください。

今後の講演会開催にあたり、いただいたご希望について

- ・ 就労に関する支援の在り方
 - ・ 発達障害を持つ人の就労支援について
 - ・ 発達障害と就労についてというテーマにしてほしい
 - ・ 社会参加をしていくにあたっての講演
- 平成 29 年 4 月 9 日（日） プラザホープにて 世界自閉症啓発デー記念講演があります。講師は 梅永 雄二氏（早稲田大学教育学部教授）、内容は「就労支援（仮題）」です。ポラリスの今後の講演会につきましては決まり次第ホームページにアップいたしますので、ご参加をお待ちしております。

この他にもいただきました沢山の貴重なご意見・ご感想を、
これからの活動に活かしていきたいと思えます。

どうもありがとうございました。